

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月20日現在

機関番号：55503

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2009～2011

課題番号：21652024

研究課題名（和文） 日本近代文学における装幀と図像に表れた作家の造本意識の研究

研究課題名（英文） Consciousness of the writer appeared bookmaking in modern Japanese Literature and iconography sotei

研究代表者

一色 誠子 (ISSHIKI SEIKO)

徳山工業高等専門学校・一般科目・教授

研究者番号：80259936

研究成果の概要（和文）：

本研究で、自著の装幀に深くかかわってきた室生犀星の造本意識が、同時代の作家たちと比較して特異であることを明らかにした。また、装幀や造本に関する議論が盛んになされ、それ以降に影響を与えていった昭和10年前後を中心に、作家と装幀家の思惑を探った。さらに、ブックデザイナーの出現により、装幀から作家の色が薄れてき始めた昭和30年代に注目した。本研究から、作家、画家、出版社の各々の思惑を整理し、活字文化と美術とが共鳴していく過程を明らかにするという新たな展望を得た。

研究成果の概要（英文）：

In this study, showed that the consciousness of bookmaking Saisei Muro has been deeply involved in Sotei his book is the specificity compared to the writers of the same period. In addition, discussion about Sotei and bookmaking have been made actively, especially in the before and after 1935 was an impact on later, explored the speculation of writers and Sotei house. In addition, we focused on the 1950s with the advent of book designer, the color of the writer began to become much less from Sotei. Got a new outlook that from the present study to clarify the process to organize the speculation of each writers, painters, publishers, print culture and art and go to resonance.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	500,000	0	500,000
2010年度	300,000	0	300,000
2011年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総計	1,000,000	60,000	1,060,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：装幀・図像・造本意識・日本近代文学・室生犀星

## 1. 研究開始当初の背景

明治期の印刷出版、活版洋装本の時期の造本、岸田劉生ら大正アヴァンギャルドと恩地孝四郎らの「月映え」の詩人たちを中心とした詩と芸術表現の一体となった造本、そして、文学の中に表れる図像と装幀は興味深い。

しかしながら現在、上記の時代の書物のほとんどは、復刻本でも出版されない限り全集で読むしかない。そこに表出しているのは、切り離された作品の一部である。これまでも、日本近代文学研究において、装幀や挿絵を通して作品世界を読み解くことは繰り返さ

れてきた。最近では、「文学と図像との関わりを問うことは「文学」および「文学研究」の枠組みを問うことでもある」として、「日本近代文学」第78集(日本近代文学会 2008年5月)で、近代文学の図像学が特集として組まれている。

筆者は現在までに、劉生、恩地らとの交流と独自の美意識により200冊に及ぶ著書を出版し、自らの意思を徹底して装幀に反映させた室生犀星の造本意識を、晩年の小説を中心に読み取ってきた。例えば、『蜜のあはれ』(昭和34年1月1日から4月1日「新潮」)の造本と装幀をめぐる物語として書かれた『火の魚』(昭和34年10月1日「群像」)である。作中の〈私〉に語らせる《書物はその装幀を造り上げたところで、何時もその書物とわれを告げるのが、私のならひであった》は、作品を書くだけで作家の仕事が終るのではなく、装幀をして世に送り出すまでがその責務であることを言うものだが、作品が出版されることにより「書物」として出発することを意図した言及であることを「『火の魚』論—一つの芸術論として」(「日本文学研究」31号 梅光女学院大学 1996年1月)で述べた。だが、これは、自身による装幀だけでも56作品にも及ぶ犀星の著作の一部にしか過ぎない。また、装幀に関して出版社任せではなく、自身が装幀をしない場合には自らが装幀や題僉を依頼している恩地・劉生・畦地梅太郎・山口逢春らとの関係から見える、活字文化と美術との共鳴への言及はこれからの課題である。

## 2. 研究の目的

本研究は、作家が自身の作品を「書物」として発表する際に、自著の装幀と挿絵などの図像に対してどのような意識を持ち、一冊の「書物」を造っているのか。当時の文壇の動きや、出版界の状況と対比しながら、作家が「本を造る」ということがいかなることなのかを研究することを目的とした。

## 3. 研究の方法

### (1) 平成21年度

犀星の著作のうち、「俳句集」「詩集」「童話集」についての調査研究を実施した。

併せて、「月映え」と恩地孝四郎についての調査研究を実施した。調査は、計3回に分け実施し、室生犀星記念館(金沢市)および石川近代文学館(金沢市)で行った。

### (2) 平成22年度

犀星の著作のうち、全「随筆集」および「小説」(昭和20年代まで)についての調査研究を3回に分け実施した。調査場所は、室生犀星記念館(金沢市)および石川近代文学館(金沢市)である。また、大正元年

～昭和10年の出版界の動向を文献調査した。文献調査は、主に図書館レファレンスを利用した。

### (3) 平成23年度

犀星の著作のうち、「小説」(昭和30年代)についての調査研究を実施した。

調査は、3回に分け実施した。また、昭和10年～昭和37年の出版界の動向を文献調査した。調査は、室生犀星記念館(金沢市)で行った。

## 4. 研究成果

(1) 室生犀星の全著作の装幀について調査・撮影をし、電子媒体に保存の上分析をした。調査の過程で、異本の存在が確認された。また、古書完品として手に取ることできにくい童話を、室生犀星記念館および石川近代文学館で閲覧撮影することができた。

(2) 調査の中で、昭和20年前後の紙の調達の難しい折の造本の工夫には、注目すべき点が多くあった。例えば、前年度の調査で『蝶・故山』(昭和16年7月/桜井書店)と『甚吉記』(昭和16年12月/愛宕書房)が、内容につながりがないにもかかわらず同じ表紙模様であることがわかったのだが、紙の調達の都合によるものであることが判明した。加えて、『日本美論』(昭和18年12月/昭森社)とその再版である『夕映梅花』(昭和21年10月/昭森社)の調査では、犀星と出版社との装幀に関する書き込みの閲覧もでき、装幀と造本の過程を知ることができた。

(3) 調査と並行して、明治44年から昭和40年にかけての装幀と造本に関する文献調査も行った。特に、岩本柯青、庄司浅水、柳田泉らが創刊した『書物展望』などを舞台に、装幀や造本に関する議論が盛んになされ、それ以降の装幀と造本に影響を与えていった昭和10年前後を中心に分析と考察をした。さらに、昭和10年前後の犀星とその周辺に焦点を当て、作家と装幀家の思惑がどのように働いていたのかを探り、装幀と造本の議論が盛んになる中で犀星が自著にどのような装幀を施していったのかを考察した。

(4) 最終年度には、出版社の意向が強くなり同時にブックデザイナーが出始め、装幀から作家の色が薄れてき始めた昭和30年代に注目した。この時代も犀星は、自装あるいは画家の装幀を纏うことを続け、出版社や編集者との話し合いを重ねつつ、晩年に至るまで装幀から犀星の色が薄れていくことがなかったことを確認した。さらに、著作の初期から晩年に至るまで自ら装幀にかかわってきた犀星と、同時代の作家たちとを比較した場合、

犀星の造本意識が特異であることも確認した。これらの事項をまとめて、研究会例会(犀星を読む会)において、「こだわる自装と芸術家の作品を纏うことの意味——室生犀星の場合」として報告した。作品論からは離れるが、作家の造本意識を探っていたという点において、今までの室生犀星研究にはない視点として意義のあるものであると考える。

(5) 本研究を経て、今後新たな研究の展開は、次の通りである。

① 撮影し電子媒体に保存整理した装幀に関する資料を、広く活用できるデータベース化することが課題として残った。データベース化することで新たな展開が期待できるため、近年中に完成させる計画である。

② 室生犀星の造本意識を探る中で、次の視点からのアプローチが必要になった。それは、「白樺」の影響である。白樺派の衛星的な存在であった岸田劉生と彼のつながりから白樺派の影響圏にあった恩地孝四郎との関係。両者は、室生犀星の装幀を手がけている。また、室生犀星も初期の文学活動の頃(「感情」のころ)は、白樺の文学上の思想に寄っていた。そして、武者小路実篤主催の「大調和」への寄稿や岸田劉生が初期にかかわっていた「春陽会」への室生犀星の賛同文などからも、白樺とその周辺からの影響がなかったとは言いがたい。このようなことから、西欧からの新しい刺激をいち早く発信し、活字文化と美術の共鳴を一つの雑誌の中で展開していた「白樺」の、同時代に与えた影響を装幀と造本の観点から、今後の研究を進めたいと考えている。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

- ① 一色誠子「装幀と造本をめぐる作家・装幀家・芸術家の思惑——室生犀星とその周辺から」(査読有「日本文学研究」第46号 pp.28-pp.38, 2011年)

[学会発表] (計 3 件)

- ① 一色誠子「室生犀星と岸田劉生を結ぶ点と線——白樺派の視点から」(室生犀星を読む会, 2010年3月27日, 日本大学国際関係学部)

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称:

発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

○取得状況 (計 0 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

[その他]  
ホームページ等  
なし

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

一色誠子 (ISSHIKI SEIKO)

徳山工業高等専門学校・一般科目・教授

研究者番号: 80259936

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号:

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号: